

2021年聖霊降臨節第二十三主日(10/17)礼拝

「まさしくわたしだ！」

ルカ福音書第24章28節から43節

ルカによる福音書 24:28 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。29 二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。30 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。31 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。32 二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。33 そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、34 本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。35 二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

36 こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。37 彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。38 そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおりに、わたしにはそれがある。」40 こう言って、イエスは手と足をお見せになった。41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。42 そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、43 イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。

1 エルサレムへの道

四年間、礼拝で共に聴いてまいりましたルカによる福音書もあと残り僅かです。ルカによる福音書の冒頭は、次のような言葉があります。「わたし達の間で実現したことがらについて最初から目撃してみことばのために働いた人々が私達に伝えた通りに、物語を書き連ねようと、多くの人々が既に手を付けています。そこで敬愛するテオフィロ様、わたしもすべての事をはじめから詳しく調べていますので、順序正しく書いてあなたに献呈するのがよいと思いました。お受けになった教えが確実なものであることを、

よくわかっていただきたいのであります」(1:1~4)。ルカが冒頭にテオフィロという人に献呈する格好で記したように、ルカ福音書は、実に細やかに丁寧にイエス・キリストの出来事が描かれています。ですから、私達もこの福音書を、裁縫の半返し縫いのように、少しずつ反復しながら丁寧に見ていきたいと思えます。

エマオ村の夕食の席、パンを取って賛美と祝福の祈りをささげ、パンを裂いて渡す旅人の姿に、はっとしたクレオパともう一人の弟子。「あっ、この方は、主イエス!」、イエス様は食事の席でいつもパンを取って祝福し、これを裂き、弟子達に渡しておられたのでしょうか。二人が主に気づいた途端、イエス様の姿は消えます。しかし、消えたけれどもいなくなったわけではありません。数時間前、暗い顔をしてエマオへと向かっていた二人の顔は輝いています。「主が聖書の話をしてくださっている時、私達の心は燃えていた、まさしくあのお方だ。」主イエスによって心に灯された火を互いの内に確認し合いながら、二人は立ち上がり、暗い夜道を恐れもせずに、エルサレムへと駆け抜けます。そこには仲間が集まっている家がありました。ほんの半日前、二人が後にした時は、不安で暗い空気が垂れ込めていた家。が、息せき切って駆け戻った二人が見た光景は意外なものでした。十一人の使徒を中心に仲間が集まっています。その中心にいたのは、シモン・ペトロ。彼が復活の主イエスに出会ったと言うのです。人々は興奮していました。

2 主イエスとシモン・ペトロ

ルカは、ここで、復活の主は「シモンに現れた」と語ります。私達には、「ペトロ」と言った方が馴染み深いのですが、ペトロの元々の名はシモン。「ペトロ」の方が新しく、主イエスがつけたニックネームで「岩」という意味があります。ルカ福音書では、弟子となった後は、「ペトロ」と記す事の圧倒的に多いルカが、ここでは「シモンに現れた」と言っています。何故なのでしょう。

「シモン」とは、主イエスが心を込めてペトロを呼ぶ時に口にされていたからだと思えます。人々は、「シモン、シモン」と呼ぶ声と共に、復活の主イエスがペトロに現れた事を思い起こし語り伝えていたのです。そして、主イエスが最後に「シモン、シモン」とペトロを呼んだのは、十字架に架かる前の晩、聖餐を定めた過越の食事の後、彼の裏切りを予告した時のことでした。第22章まで遡ってその時の主のペトロへの言葉を聞いてみたいと思えます。

「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけて

ることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、きょうだいたちを力づけてやりなさい。」シモン・ペトロはこの主の言葉に反発し宣言します。「主よ、ご一緒なら、牢に入って死んでもよいと覚悟しています。」いきり立つペトロに主は答えます。「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないという」(24:31~34)。ペトロと主イエス、どちらが正しかったか、皆さんは知っています。主イエスの言葉通りとなりました。オリーブ山での祈りの後、ユダの手引きで逮捕され大祭司の館に連行された主イエス。ペトロは、その後を追って、大祭司の館に潜入します。しかし、大祭司の館の人々に「おまえはイエスの仲間だろ」と疑いがかけられると、ペトロは必死で「イエスなんて知らない、関係ない」と否定します。その直後の出来事をルカは非常に印象深く語ります。ペトロが否定の言葉をまだ「言い終わらないうちに、突然、鶏が鳴いた。主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは主の言葉を思い出した。そして外に出て激しく泣いた。」裏切ったシモン・ペトロを主イエスの眼差しが包み込んでいます。「私はあなたを赦す。あなたのために祈る。」イエスの眼差しは、裏切りのペトロに、罪人を徹底的に愛し赦す御神の姿を告げていました。これを最後にペトロの姿は、イエスの十字架を描く23章から消えます。

彼が次に現れたのは、週の始めの日、「イエスの遺体が墓にない、二人のみ使いからイエスは復活されたと言った」との女達の報告を聞いた時です。聞いた途端、ペトロは立ち上がり墓へと走った、とルカは語っています。墓に走っていく人などいません。ペトロの脳裏には、主イエスが自分に向けて、「シモン、シモン」と呼びかけ、「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、きょうだいたちを力づけてやりなさい。」という言葉が響いていたのではないかと思うのです。ペトロは主の声、主の言葉を思い出しながら、ひたすら墓に向かって走った、走らずにはいられなかった。「あなたがいないとダメです。主よ、あなたに会いたい」と叫びながら。ですが、女達の報告の通り、墓にはイエスの亡骸を包んでいた亜麻布があるだけ、主の遺体はなくなっていました。ペトロはこの事実には驚き怪しみながら家に帰った、と福音書は語ります。

ペトロが、復活の主イエスご自身と出会ったのは、この後のことのようにです。ルカは直接にその場面を語りません。ただ、「本当に主は復活して、シモンに現れた」と短く報告するのみです。それは、既に主イエスご自身が語っておられたからでしょう。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、

わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、きょうだいたちを力づけてやりなさい。」主イエスがどれほど、ペトロのことを、弟子達の一人一人を愛しておられるか、そして、私達一人一人を愛しておられるか。この言葉に現れています。弟子達は弱い、私達も弱い。十字架の死を前にしても信仰を持ち続ける事など到底できはしない。イエスはその事をよくご存じなのです。だから、弱い者達の為に主イエスは神への信仰が無くならないように祈ってください。そして、人間の不信仰の罪ゆえに、十字架に架かって、その罪を贖ってください。だが、イエスの愛はもっとすごい。ご自身が復活したことを弟子達に示し、立ち直らせてくださるのです。人の罪に、自分達の罪に絶望している弟子達が、神に絶望しないように、主にある希望に立ち上がることができる為に。

3 弟子達の前に現れた理由

ここに、十字架の死から復活された主イエス・キリストが弟子達の前に現れた一つの意味があるのではないのでしょうか。復活の主は、なんの意味もなくご自身を顕したりはなさらない。ペトロをはじめ弟子達に、ご自身の十字架と復活の意味を悟らせ、彼らを立ち直らせるためです。罪の中から、新しい命へと立ち上がらせるため。

だから主イエスは、主の復活を証する弟子達の間立って仰います。「あなたがたに平和があるように。」あなた方は、天地万物を造った全知全能の御神を神とできず、自分達を神として、神と対立して歩んでいた。しかし、そのあなた方の罪は、私の十字架で完全に贖われた。天の神さまとあなた方との間にあった敵意の厚い壁は完全に取り壊され、平和の道が拓かれた。だからこそ、あなた方は、神を神として、神と正しいお付き合いできるものとなった。今、あなた方の前に神との平和の道が差し出されている、この平和の道を行きなさい。「神との平和があなた方にあるように。」ユダヤの人々が日常生活で交わす挨拶の言葉を、復活のイエス・キリストは、全く新しい意味で祈られました。そして、その祈りと共に愛する弟子達の真中に立たれました。十字架の贖罪の死から甦ったご自身の姿を見せる為。

4 体をもって甦られた主イエス

主は、弟子達をどこへと立ち直らせようとされたのか。人間をこよなく愛する天の御神を神として生きる道、神との平和に生きる命へと立ち直らせる為です。だから、主イエスは弟子達に自分の手足を差し出されるのです。「な

ぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおり、わたしにはそれがある。」(38,39 節)。「まさしく私だ」と仰りつつ、手足をぐっと弟子達の前に差し込まれるイエス。それは、十字架に磔けられた時、釘で打ちぬかれた跡が刻まれている手足です。あまりに残酷で目をそむけたくなるような人の罪の痕跡がしっかりと刻まれた、神の御子の手足でした。そう、主イエスの復活は十字架と引き離して考えることはできないのです。その事を弟子達に示す為に、主イエスは、十字架に架かった体をもって、永遠の命へと甦りました。実態のない亡霊ではない。主の十字架が確かであったように、復活の主イエスもまた確かな体をもっている、その事を弟子達が理解できるように。確かにここにある私の体こそ、神との和解が成し遂げられた証だ。あなた方の罪が赦されたというのは、ここにある私の体が証明しているのだ、私が肉と骨を持っているように、あなた方の救いは確かな事だ、と主イエスは弟子達に力強く宣言しておられるようです。「まさしく私だ、まさしく神との和解はなった。あなた達を縛りつけていた罪と死の力は解き放たれた」。だから、罪と死を打ち破った復活の主イエスのお体は、神の愛の証、神の御子の愛の証。この愛を必要としない人がいるのでしょうか。皆、どこかでこの神の愛を、御子の愛を求めています、そうとは気づかぬままに生きている人が多くいますが、皆、愛されていることを求めています。神の愛なくして、無償で無条件に愛してくださる愛なくして、人として生きていくことは難しいし、人として死ぬことも難しい。コロナ禍に悩む私達は、この事をよく知っているのではないのでしょうか。

5 生活の只中で働かれるキリスト

さて、弟子達の為に、生身の体をもって復活された主イエス・キリスト。しかし、とうの弟子達はまだ信じ切ることができません。「彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっていた」(41 節)。「不思議がっていた」とは、いぶっていた、驚いていた、と訳せる言葉です。弟子達は、「主が復活されたのなら、こんな喜ばしいことがあるのだろうか」と思いつつ、「でも本物の主だろうか?」と半信半疑。そこで、主イエスは「何か食べる物があるか」と尋ね、差し出された焼き魚を弟子達の前で食べられた、とルカは語ります。私たちの聖書には語られていませんが、古いカトリック教会では、この時、主は焼き魚と共に、蜂蜜も食べられた、と言う伝承があるそうです。古代から蜂蜜は栄養豊かだと言われていました。十字架と復活を成し遂げら

れた主イエスが、美味しそうに、固唾をのんで見守る弟子達の真中で食事をされた、ユーモラスです。そう言えば、主はエマオ村でも夕食の席でご自身を顕されました。生活の匂いのする復活のキリストです。食事は、私達の体と心を養う命の基本、生活の基本。パウロがコリント教会に書き送った手紙でもわかるのですが、最初の教会では、みんなが食事をする為に教会に集まって来たようです。そこで、主イエスの言葉の通り、食卓のパンを裂き、葡萄酒を回し飲み、主イエスの十字架と復活を思い起こしたのです。それが、やがて聖餐式となりました。今では儀式として執り行われる聖餐式ですが、最初は、みんなが集まってする食事でした。だから、私達も又、聖餐の食卓を囲む時だけ、主の言葉を思い起こすのではなく、毎日の食事の時、主イエスの裂かれた体と流された血に込められた神の愛を思い起しつつ、これをいただくことができるのです。十字架と復活の主イエスは、そのようにして私達の生活の中で出会ってくださる、私達の生活に食い込んでくださるのです。そして私達の体と心を、変えてくださるのだと思います。

そうでなければ、私達は真実に変わることはできません。私達は、どこでもない、自分の生活の中で、体と心をもって罪を犯すからです。この地に息をしている者で、自分という存在を持て余さない人はいないのではないのでしょうか。確かに、イエス・キリストの十字架によって神との間に平和の道は開かれました。が、日々の生活の中で、この神との平和の道を選び取るよりは、自分を神として生きる道を歩みたがる習性からなかなか抜け出す事はできません。私たちの体に、心に、自己中心的な想いが刻み込まれているから。体の欲に鼻づらを掴まれ、振り回されることもあります。体を持ってこの地上で生きる、とは、弱さと愚かさのうちに生きる、という一面を持ちます。この地上で体をもって生きる以上、私達は、生活の中で神の愛をそのままには受け取ることが難しい。

しかし、私達がそうであるからこそ、復活の主イエスは、復活の体を持って弟子達の間立って下さいました。そうして主は、弟子達への、私たちへの愛を示された。「私はもう十字架から甦ったのだから、あなた達も弱さや愚かさや無縁の存在になれる！」とは仰らない。いや、寧ろ、この地上で、体を持ちつつ生き、呻く者の苦しみ、痛みに深く共感しながら、「あなたには愛なる神がおられる。体をもっている、この神との平和のうちに生きることができるよう導く者がいる。それがまさしく私だ、他の誰でもない、あなた方の救いの為にある、まさしく私だ。私はあなた達と共にいて、支え、神との平和の道へと導く、永遠の命へと導く」と弟子達に、ペトロ達に示されました。だからこそ、シモン・ペトロは、立ち直ることができました。きょうだいを励ますことができました。

勿論、シモン・ペトロだけではない。イエス・キリストは、聖霊を通して、今も生きて働き、私達一人一人と共に生活してくださっています。生活の中で、「あなたと共にいるのは、まさしく私だ」と仰ってください。そして、神の愛の証である十字架の釘あとと残る御手を伸べ、私達に進むべき道を指し示してください、釘あとと残るみ足で、前を進んでくださるのです。

だからこそ、体を持ってこの地に生きる私達には、確かな希望があります。自分に対する希望ではありません。人の強さと人の知恵を自分に期待する希望は必ず、ついでます。自分の信仰の強さを求めたペトロが自分に絶望したように、私達は自分には絶望するしかありません。ですが、自分に徹底的に絶望した時こそ、「まさしく私だ」とご自身を私たちに差し出す復活の主がおられる事を知るのです。

そして、この主イエス・キリストに希望を置いて立ち上がる事ができます。私達は弱くとも、復活の主イエスは違う。私達は愚かでも、復活の主イエスは違う。この主イエスに希望を置いて、何度失敗しても、主イエスの教えに生きようとする時、私達は、この地上で体をもって生きつつも、まるで天国で生きるように生きて行く命、復活の命を生きることができます。このように私達の為に、「まさしく私だ」と私達に徹底的にご自身を差し出す御子イエス・キリストをお与えくださる父なる御神を、賛美せずにはおられません。